

4 古典

確認問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、竹取の翁と^①いふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに^③使ひけり。名をば、さぬきのみやつこと^④なむいひ*。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋あり*。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと^⑤うつくしうて^⑥ゐたり。

〔竹取物語〕より

□(1) — 線①〜⑥のことをばを、現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書いて答えなさい。

⑤	①
	②
⑥	③
	④

□(2) — 線④「なむ」の意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 強調 イ 疑問
ウ 反語

□(3) 本文中に二か所ある*に共通して入ることばを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア けら イ けり
ウ ける エ けれ

□(4) 本文中から、①「たいそう・とても」という意味の副詞と、②「かわいらしい」という意味の形容詞を一つずつ探し、①はそのまま書き抜き、②は終止形に直して答えなさい。

①	②
---	---

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高名かうなむの木のほりといひしをのこ、人を*おきてて、高き木に*のぼせて梢すゑを切らせしに、いと危あやふく見えしほどは言ふこともなくて、降おるる時に、軒のき長ながばかりになりて、*「あやまちすな。心して降りよ。」と*言葉ことばをかけ侍りしを、①「かばかりになりては、*飛び降るとも降りなん。②いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「そのことに候まをふ。目くるめき、枝危えだあやふきほどは、己おのが恐れ侍れば申さず。あやまちは、③やすき所やすきところになりて、必ず*仕つかることに候ふ。」と言ふ。④あやしき下臈げらふなれども、聖人の戒いましめにかなへり。鞠まりも、かたき所かたきところを蹴出けいだしてのち、やすく思へば、必ず落おつ*と侍るやらん。

〔兼好法師「徒然草」より〕

(注) おきてて＝指図して。 のぼせて＝登らせて。

あやまちすな＝しくじるな。

言葉ことばをかけ侍りしを＝言葉ことばをかけましたのを。

飛び降るとも降りなん＝飛び降りても降りられるだろう。

仕る＝する。 と侍るやらん＝と侍ることです。

□(1) — 線①「かばかり」の「か」が具体的に指し示している場所を、これより前の本文中から二字で書き抜いて答えなさい。

--

□(2) — 線②「いかに」、④「あやしき」ということばのここでの意味を、それぞれ書いて答えなさい。

②
④

□(3) — 線③「やすき所」と対義語的に用いられていることばを、これよりあとの本文中から四字で書き抜いて答えなさい。

□(4) 本文を、作者の見聞した事柄が述べられている部分と、その事柄に対する筆者の感想と連想とが述べられている部分とに分けるとすれば、どこで分けられますか。後半の最初の一文の初めの四字を書き抜いて答えなさい。

□(5) 「高名の木のほり」の言葉に込められている教訓を表す四字熟語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 一挙兩得 イ 我田引水
- ウ 油断大敵 エ 因果応報

--

3 次の短歌とその鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ
紀貫之のり

この歌は、日の光がのどかに照っている春なのに、どうして落ち着いた心もなく、桜の花は散っているのだろうか、というほどの意味もっています。そもそもこの有名な歌は、「古今和歌集」の撰者の一人で、紀貫之のいことである紀友則が詠んだものです。

作者は、桜の花が、風の吹いていないうらかな春の日ざしの中でとぎれ

ることもなくはらはらと散っている情景を詠んでいます。* 爛漫の春の味わいを楽しむ境地をうたっているといえるでしょう。その一方で、落花の背景となる青い空や桜の風情あるやわらかな色彩とは対照的に、はかなく散ってゆく桜の花を名残惜しく思う作者の気持ちも強く感じ取れる歌で、同じ古今和歌集に載せられている「*」と似た発想の歌といえるでしょう。

(注) 爛漫＝花の咲き乱れている様。

□(1) 「ひさかたの」の歌の「しづ心なく」と対照的に用いられている語句を、同じ歌の中から四字で書き抜いて答えなさい。

□(2) * に入る最も適切な和歌を次から選び、記号で答えなさい。

- ア みよし野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける
- イ いにしへの奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな
- ウ 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
- エ 見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし

--

(3) — 線部「紀貫之」の、①活躍した時代と、②彼の作品を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|--|--|
| □(1)
ア 飛鳥時代 イ 奈良時代
ウ 平安時代 エ 鎌倉時代 | □(2)
ア 枕草子 イ 源氏物語
ウ 徒然草 エ 土佐日記 |
|--|--|

①
②